

主筆 江原萬里

聖書の眞理

第六十二號

十二月號

昭和三年二月十六日第三回郵便物認可(毎月一日一回發行)

昭和七年を送る

主筆

イエス・キリスト

江原萬里

神の國の到來

人の子

神の子

神が父であり給ふことの原因と結果

江原萬里

無益なる僕

森本慶三

柏木通信

齋藤宗次郎

身邊漫筆

江原萬里

昭和七年度總目錄

本誌定價二十錢

昭和七年十二月一日發行

江原萬里著

近刊 宗教と國家 (エレミヤ記の研究)

今月中旬岩波書店より發行の豫定

四六版 四〇〇頁位 定價約一圓五十錢

我が國民は古きユダヤ民族に類似する多くのものを有つ。エレミヤ記を読んで驚くことは、神武天皇時代遠きユダヤで語られたエレミヤの預言が、現代の我等日本人の思想と生活にこんなまであてはまるかと云ふ事である。ここに内心の鋭い分析がある。その暗黒面の摘發がある。然かも複雑極りない人の心を統制する深遠なる宇宙的原理の發見がある。國家以上に高く嚴存する正義がある。そこに人生の光明がある。此の正義と没交渉なる社會的、國家的宗教の批判がある。國民生活を指導する政治の根本方針の標準がある。二千六百餘年前の古きユダヤの預言者の預言は、その儘移して現代日本の國家と社會との深刻なる批評となり新時代の指針となる。

是故に我が國人に殆ど無視されてゐる舊約聖書中のエレミヤ記は、現代の基督者に深い信仰と敬虔の念とを供するのみでない、社會思想家に新なる暗示を、政治家に偉大なる理想を供するものである。目下國家未曾有の重大時期に際會し、且つ思想問題が喧しい昨今、幾分でもエレミヤ記の價値が我が國人に認められれば、此れ程の喜はない。(著書自序より)

クリスマスへの贈物として好適なり。本誌讀者の方にて著者署名を需められる方は聖書の眞理社へ申込まれたし。送料とも一圓七十錢拂込のこと。餘分あらば御返しします。

聖書の眞理定價 (送料共)

一 部 二 十 錢
半年(六部) 一 四 十 錢
一年(十二部) 二 四 十 錢
海外一年 二 四 六 十 錢

拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番) へ。獨立堂にてもよし

江原萬里著

聖書の現代經濟觀

(聖書の眞理社にて扱ふ)

定價 一 四 二 十 錢
送料 八 錢

昭和七年十一月二十八日印刷納本
昭和七年十二月一日發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷 江 原 萬 里
兼發行人

東京市澁谷區向山町九七
發行所 聖書の眞理社

東京市神田區三河町三ノ四
印刷所 今 井 印 刷 所

東京市淀橋區柏木四丁目九四六
發賣所 獨 立 堂 書 房

振替東京二九四八番

聖書之眞理

第六十二號

昭和七年十二月一日發行

昭和七年を送る

從來經濟界の不況の最大原因の一つであつた獨乙の賠償金支拂問題は、昨年米國大統領フーバー氏の向一年間債權取立猶豫の宣言により事實上解決の緒についたが今年七月ローザンヌに開かれた歐洲の債權國の會議により、若し米國が此等の諸國に對する戦債を抛棄するならば、此等の諸國が獨乙に對して有する賠償金の請求權の殆ど全部（僅か十五億圓を留めて）を抛棄することを決議した。十一月八日大統領の改選を行つた米國は少なくとも今年末迄には之に對して何とか應答する筈である。大戰以來の世界經濟の痛は之で殆ど切開された。果して然らば我等は今年のクリスマスを迎へて

いと高きところには榮光、神にあれば
地には平和、主の悦び給ふ人にあれば

と云ひて歡喜すべきであらうか。否、戦雲は益々濃くなつて地を覆ひ、殊に東洋に低迷して居るではないか。今年に入つてから世界の平和は益々遼遠のものとなつた。

最近六年の準備をなし、今年初ゼネバに開かれた世界六十餘國の軍縮會議は六ヶ月を費して何を待たか。其の既往の事績は今後を推知せしめる。今は軍備縮少ではなく充實である。明年度の我國の豫算案の大膨張を見よ。

今秋、我が國が滿洲國を承認した事は營に我が國のみでなく、世界の大事件であつた。世界の諸國殊に米國政府は之を以て東洋平和の基礎をなしてゐる九ヶ國條約及び聯盟規約と不戰條約との破壊であると云ひ、我が國を以て條約の背戻者、強盜、世界平和の破壊者とするに至つたのである。嘗て我國は朝野舉つて支那が滿洲に於ける我が國の條約上の權益を侵害した事を怒つた。今や世界の諸國民は我が國を以て條約の違反者なりとする。近く開かれる聯盟總會に於て我が國の代表者は之に對し

て何と辯明するであらうか。

我が國の外務大臣の聲明によれば、東洋の事情は特種のものであつて、歐米の事情を以て一律に之を論議する事は出来ないとある。然り西洋には西洋固有の疾患があるやうに、今や東洋全體が其特種の事情の下に混亂を重ねつゝあることは疑の餘地はない。如何に之を平和に導くかは單純なる國際條約の法律的解釋は用をなさない。

然らば何が東洋の特種の事情であるか。注意して印度を見よ、そこに起りつゝある革命の氣運。支那を見よ、其の混亂。而して日本の内部を注視せよ、そこに横はる大なる暗黒。若し日本が東洋諸民族の指導者であり、東洋の唯一の安全保障者であると云ふならば、日本内部の不安を見れば、如何に東洋全體が大なる渦卷の中にあるかわかるであらう。

我國は東洋諸國が未だ目覺めぬ先に、いち早く西洋の現世的幸福主義の思想を取り容れ、東洋傳來の來世觀を棄てた。而して西洋で發達した科學を以て宇宙の根本真理とした。之に由つて産業を起した。それと同時に西洋

流の個人思想は盛んとなり、政治に、經濟に、教育に、社會に大なる變化が來た。近時婦人の覺醒は家庭から起つて社會狀態に著しい變革を來しつゝある。かくして古き日本は西洋化した。

さり乍ら、若し之を以て數千年來の東洋が一朝にして西洋となつたと思つたならば、そんな皮相な觀察はない西洋の諸制度、その立憲政治、資本的生産、個人主義的社會組織が東洋の表面に廣がれば廣がる程、東洋諸民族の生活の矛盾は甚しくなつて來た。最も先に進んだ我が國に於て最も著しく、その結果は農村に最も明かである之がため日本人の胸中の不平と不安とは深刻を極めて來た。滿洲問題とは何か。内なる腫物が皮膚の一部を破つて外に出た一點に過ぎない。内にはそれよりも更に悪性の腫毒を包藏して居るのである。政府の大官、政黨の首領財閥の指導者の暗殺、それ以上に深い極端右翼の陰謀而して他方共產主義者の地下運動！

我が國の基督者よ、今は堅く信仰に立ち、世の光、地の鹽となるべき時である。

イエス・キリスト (三)

江原 萬里

六 神の國の到來

イエス、ヨハネの囚とらはれし事をききて、ガリラヤに退き後ナザレを去りて、セブロンとナフタリとの境なる海邊のカペナウムに到り住み給ふ。之は預言者イザヤによりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く『セブロンの地ナフタリの地、海の邊、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、暗くに座する民は大なる光を見、死の地と死の蔭かげとに座する者に光のほれり。』

この時よりイエス教を宣へばじめて言ひ給ふ。『なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり』(マタイ傳四・一二—一七)。

一世の人心を震撼したバプテスマのヨハネがヘロデ・アンチパス(ヘロデ王の子)を痛責して死海の邊なるマケ

ラスの牢獄に幽閉された頃(多分紀元二十七年)、イエスはガリラヤ湖畔の漁村に現はれ、公然民衆に教を宣へ始め給ふた。曰く

時は満てり、神の國は近づけり。汝等悔改めて福音を信ぜよ(マルコ傳一・一五)

と。イエスラルの民が預てから神の約束を受け、その到來を待ちに待つたところの神の國が時満ちて、今イエスの出現に由つて彼等に近づいたとの宣言である。

抑も「神の國」とは御靈たまが各人を支配する國の事である。人皆此の御靈を受けて心から神の聖意に服従し、服従することに由り眞の自由あり、社會に完全なる調和ある國である。聖にして義、愛にして喜悅、平和、寛容、仁慈善良、忠信、柔和、節制(ガラテヤ書五・二二)、一言以てせば、我等が此の地に生れ出でよより、我等の靈魂が言ひ難き嘆きを以て探し求めてゐる人生の至上善が、始めて確實に我等の物とせられる國である。

神の國は又「天國」とも云はれる、何となれば、此の自由あり、喜悅あり、協和ある社會は天から新に降り、

我等を受容れ、我等を根本から改造し、之を天にまで引上げるものであるからである。神の國は我等の生來の性質から出でない。我等の有つ智慧と能力とに由つて地上に建設されるものでもない。現社會制度の變革によつて來らない。イエスの出現によつて既に到來したのである。イエスは未だ嘗て一度も人は生れ乍ら神の子であると教へ給はなかつた。故に人間の社會が此の儘神の國となるのではない。神の子たるイエスの御靈を受けて初めて神の子とせられ、神の國を嗣ぎ得るのである。近時「神の國運動」とか稱して、我等の社會改良運動に由つて神の國を地上に出現せしめやうと志すものがある。それは大きな誤謬を爲しつゝある。

神の國の基本は、天地萬物の創造主、完全なる智慧と能力とを有ち、義にして愛なる神が、我等の父となり、我等はその子とせられる事である。我等は之以上の幸福を考へ得るであらうか。此の神の國がイエスの出現に由つて地上に到來したのである。何故か、それはイエスは實にユダヤ人が多年待ち望んだメシヤ、即ち神の國の建

設者であり、又其の王であり給ふたからである。否、イエスと神の國との關係は、只單にイエスが神の國を建設し、之に王たり給ふと云ふだけではない。それ以上に深く、更に密接な關係がある。イエスは實に神の國の萌芽であり、其の根本原理であり、神の國の中核であり給ふのである。それ故にイエスの出現と神の國の到來とは同時であり、且つ同一であつた。

イエスは神の國の本質であり、その萌芽であり給ふ。何となれば、神の國とは前に述べたやうに、神を父とする父子の國である。而して此の父子の關係は此の地が創造されない以前、既に永遠にキリストの中に存在し、彼以外に存在しないからである。我等は宛かも葡萄の枝が葡萄の樹に連なつて始めて果實を結ぶやうに（ヨハネ傳一五・一以下）彼を受け、その名を信じて、「神の子たる權をあたへ」られるのである。（全一・二二）。即ち、イエスの有ち給ふ子たる關係に入られて、始めて神を父として拜し得、神の充ち足れる祝福を受け得るのである。

それ故、神の國の中核はイエスである。イエス對父な

る神との關係である。神の國の根本關係は決して神對我等ではない。又イエス對我等でもない。神と偕に在し、御自身神なる永遠のロゴス、神の子イエスの人格が其の基礎である。故に神の國は人間の不完全、神に對する背反、墮落擾亂に由つて毫も動搖しない「人の子」にして「神の子」なるイエスが神の國の根本原理である。又その萌芽である。彼が此の地に出現して神の國は到來し、彼の存在に由つて神の國は立ち、彼の生命の普及に由つて神の國は地上に發展する。イエスは教え給ふた。

神の國は、或る人、たねを地に播くが如し。日夜起臥する程に種はえ出で、育てども、その故を知らず地はおのづから實を結ぶものにして、初に苗、つぎに穂、つひに穂の中に充ち足れる穀なる。實、熟れば直ちに鎌を入れる。收穫時の到れるなり（マルコ傳四

・二六一―二九）。

イエスはガリラヤの湖畔に於て此の神の國の福音を宣べ、人々をして悔改めて、即ち、翻然心意を一變して、彼を信じ、彼の持ち來らし給ふた神の國に入れと勧め給

ふた。彼は人々を神の國に招致するのに、此の世の政治家軍人がなすやうに、武力を以て他國を侵略して「搾取なき理想社會」を建てやうとし給はない。彼は又奇蹟を以て人々に驚異の心・畏怖の念を起さしめ神の國を建設し給はない。又彼は社會組織を變革してパンの供給を公平ならしめ、物質的豊富を第一とする國を建設し給はない。此等は荒野の誘惑に於て彼は斷然之を拒否し給ふたのである。彼の建設し給ふ神の國は只彼の謙遜、愛、真理の證し、人に仕へること、その賠償となること、そのため十字架の死に至るまで父なる神の聖意に絶對に服従することに由つて之をなし給ふたのである。

彼は争はず、叫はず、その聲を大路にて聞く者ならん。正義をして勝途げしむるまでは、傷へる葦を折ることなく煙れる亞麻（或は燈心）を消すことなからん（マタイ傳一・二一九、二〇）。

ゆきて汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。盲人は見、跛者^{なへ}はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かざる（一・四、五）。

まことに汝らに告ぐもし汝ら翻へりて幼児おまたごの如くならずば天國に入るを得じ。されば誰にても幼児のごまぐ己ひくを卑ひくする者は、これ天國にて大なる者なり、(一八・四、五)。

異邦人の君その民を宰つかさどり、大なる者の民の上に權を執ることは汝らの知る所なり。汝らの中には然らず、汝らの中に大ならんと思ふ者は、汝らの役者えきしやとなり、首たらんと思ふ者は汝らの僕となるべし。(二〇・二五—二七)。

われの王たることは汝の言へることし。我は之がために生れ、之がために世に來れり。即ち眞理につき證せん爲なり。凡て眞理に屬する者は我が聲をきく(ヨハネ傳一八・三七)。

されば、神の國の中心はイエス御自身の人格である。その地上に於ける發展、聖社會の建設、我等の至上の幸福は畢竟イエス御自身の人格の發露に外ならない。我等の靈魂が永い間暗中に摸索し、ここかしこに探ね求めて居た至上善、神の最高の賜がどんなものであるか、何處に在るか、如何にして之を我が物となし得るか、イエスの教へ給ふた神の國を知るには、何よりも先に、その萌芽であり、中核であり、根本原理であり、且つ基礎であるイエスの人格、その神との關係を知らねばならない。

七 人の子

人の子の來れるも事つかへらるる爲にあらず、反つて事ふるこみななし、又多くの人の贖償あがなひとして己が生命を與へん爲なり(マタイ傳二〇・二八)。

其の意味

イエスの人格は二つの方面から究める要がある。その第一はイエス自ら己を呼び給ふた「人の子」は何を意味するかであり、第二は人々彼を呼び奉り、又御自身も之を明言し給ふた「神の子」の意味如何である。

イエスが自らを呼び給ふた「人の子」の意味について多くの議論がある。彼は弟子達に「人々は人の子を誰と云ふか」と聞き給ふた。(マタイ傳一六・一三)。若しメシヤの意味であるならば此の間は意味をなさない。近來イエスの人間的方面を高唱する者が此の語を以つて彼の弱々しい、我等と少しも異らない凡たゞの人、否、我等よりも

つと女々しく無學文盲なるガラリヤの大王の子と解する (Wendt Die Lehre Jesu ii. 442. 443) 然し乍ら之は明に誤つて居る。イエスは學者たちに向つて「人の子は地にて罪を赦す權威あることを汝らに知らせん」と宣ふた (マルコ傳 II・10)。

ルューキン・ウキリアムスの馬太傳研究 (The Hebrew—Christian Messiah 290) は「人の子」の語源であるギリシヤ語、ヘブル語及びアラミ語を研究した後次の如く云つて居る。

それ故我等の主が「凡^{ただ}の人」の意味に之を用ひ給はないとしたならば、「人の子」か「人」かどつちの意味に用ひ給ふたであらうか。…多分英語で「人」と譯してはアラミ語の内容を全部盡くすことは出来なうであらう。されど子又は裔^{うゑ}に重きを置く「人の子」よりも眞實に近いであらう。それ故この講演では「人の子」の語を用ふることを便宜とするが、その重點は我等の主の人類との關係 (即ち人の子) になくその眞正銘の人其の者に在ることを忘れては

ならない。

人である。其の語の内容は何よりも人である。

然り、イエス自ら己を呼び給ふた「人の子」は、彼自身獨特の自覺から湧き出たものであつて、それは眞正銘の人、而して新らしき完全なる理想の人の典型であつた。此の「人の子」が地上神の國の建設者であり、王であり、而して亦其の萌芽であり、人々をして享受せしめる根本の性質である。眞人、完全なる人格、理想の人、神の像^{かたち}に似た聖き人、神の國に入る者は此の性質の者とされるのである。それは只單に人間の將來の希望、各人が今後達成に努力すべき架空の理想に留まらない。イエスの出現に由つて既に人間の中に實現した人の理想である。而してイエスを受ける時、それが我等の物となるのである。

かく神の國の本質は完全なる人である。それ故それは善にユダヤ人の國ではない。全世界、全人類を包容し得る國である。之に人種の差別はない。貧富の制限はない賢愚の間に何の區別もない。人は人である限り、何人も

その恩恵に與ることを得る國である。

私は今までイエスの準備期として彼の出生、成長、受洗及び誘惑について述べ、彼が眞正正銘の人であり給ひ我等と同じ血肉を有し、「凡ての事われらと等しく試みられ給ひ」乍ら、然かも一度も罪を犯し給はず、完全に神の聖意を辯へ知り、之に全く服従して、その意志、その情、その行動の動機、目的、性質、悉く神との間に少しの齟齬がなかつた事を述べた。私は更に進んで、イエスが如何に我等の理想たる完全なる人格を有し給ふたかを述べなければならぬ。

罪なき人

人は皆罪の誘惑を受ける。誘はれて大てい之に陥り神に對して罪を犯す。誰か我は心中少しの邪念を留めず生れて以來未だ嘗て一度も善からぬ事を爲した事なく、自分の生涯悉く天地の公道に則し、神の聖意を實行し、少しも之から外れることなく、其の行爲は萬人の模範たり

と自稱し得るものがあるか。否、人は皆罪人である。

イエスは人であつた。故に彼は我等と等しく、否我等以上に深刻な誘惑を受け給ふた。然かるにその誘惑は、前にも述べたやうに我等のと異なり、罪から起らず、誘はれて之に陥らず、彼は一度も罪を犯し給はなかつた。此の事は實に全人類の驚異、宇宙の奇蹟である。人と云ふ人が悉く罪人であつて、義人は一人だにある事なきに彼のみ獨り義人であり、「聖にして惡なく、穢なく、罪人より遠ざかり」(ヘブル書七・二六)給ふた。誰かつらつら彼を見て、イエスも人なり、我も人なり、と云ひ得やうぞ。彼は人であり給ひ、我等は皆罪人である。墮落した人である。

然るに近來、イエスを我等と全く同一の人とし、イエスも亦我等の如く罪を犯し、決して完全な人格とは云ひ難く、神との間に其の意志、其の感情、其の行動に齟齬があり、矛盾があつたと主張する者が少なくない。フランスのペコーは云つた。我等はイエスについて知るところ甚だ僅かである。それは僅かに二三年の間の特色ある

彼の言行しかない。我等はイエスの幼少の時の生活については殆ど何も知らない。其の時腕白小僧であつたであらうイエスが、悪戯をなし、両親の命に背いた事は一度もなかつたか誰か頑是ない幼時イエスはむづかつて母マリアを苦しめはしなかつた事を保證し得るか。

成る程、イエスの生涯について我等の知るところは甚だ少ない。然しながら、イエスが全く罪を犯し給はなかつた事を立證するには決して少なきに過ぎはしない。何となれば、人は何人も成人後只の一年間でも神と全く一致した罪なき生活を爲し得たならば、それを以て過去に罪がなかつた事を推知し得られるからである。我等は成人後決して只の一年は愚か、一日と雖も完全無缺な生活をなし得ない。それは祖先から遺傳された悪質と、我等が出生以來犯して來た種々の悪行とは、悉く我等の現在の性格の一部となり、以後の生涯を制限し、我等を一時と雖もそれから離脱せしめないからである。

福音書を精讀せよ、誰か此の書からイエスの罪ある事を指摘し得るか。福音書の描き出したイエスの御姿は實

にそれ自體完全であつて、彼の衣のその如く「縫目なく、上より總すべて織りたる物」(ヨハネ傳一九・二四)である。誰か之をイエス傳の記者がイエスの缺陷は之を隱蔽し、只其の長所のみを拾ひ上げ、人間として最高の理想の品性と言行とを創作したのであると云ひ得るか。若し之は想像的架空の人物とせば、餘りにもその人物は生きて居る。四福音書の各節悉く切れば血が出る。終始一貫、寸分の矛盾憶着がない。實に天衣無縫である。若し此等の書に描かれたやうな完全な美はしい人格が彼等の前に顯れず、彼等が現實に「聞きし所、目にて見し所、つらつら視て手觸りし所」(ヨハネ第一書一・一)の實寫でなくしては、決してかやうに完全な且つ統一ある人格は描き出すことは出来ない。

然るにイエス傳の著者として有名なカイムは、イエスを人として最も完全な人、古今最大の偉人、人間として理想の典型と見乍ら、彼は四福音書を通覽して、宛かもクセノホンの書いたソクラテスと同様、イエスの品性に多少の缺陷を發見し得ない事はないと云つた(ナザラのイ

エス第三卷六四一頁。同じくイエス傳の著者として有名なルナンに至つては、明白にイエスの品性の缺陷を認め、イエスが行ひ給ふた奇蹟は彼のベテンであつて之によつて民衆を欺いて彼に信頼せしめたと云ひ、彼は又激情に驅られて自制心を失ひ、パリサイ人に對して聞くに堪へない痛罵を浴せかけたと云つた。最近モンテフキオア氏も亦、イエスのパリサイ人痛罵は決して愛の顯れと見る事は出来ないと言つた。

イエスの奇蹟がどんなものであつたかは後之を説く。

イエスがパリサイ人を痛罵し給ふたのは、果して愛なき私情からであつたであらうか。偏見邪推又は黨派心からであらうか。否、之は人々の救を思ふ熱心、その強烈な愛が、自ら冷然とし高く持し、「人の前に天國を閉ざして、自ら入らず、入らんとする人の入るを許さぬ」(マタイ傳二三・一三)不義に對する「羔の怒」であつた。パリサイ人の良心は昔泥棒を捕へる巡羅が持つたガン燈のやうに、只前なる悪る者を照すのみで、自分の行、自分の心は眞つ黒暗に隠して、少しも之を照さず、責めなかつた

イエスの愛はかゝる者の教に對して無關心であり能はなかつたのである。痛責は熱烈なる愛の反面であつた。惡人に對する神の審判も亦同様である。

罪なき根本理由

イエスが完全なる人格を有し、未だ嘗て一點の罪をも犯し給はなかつた最も明白な理由は、かやうに個々の行為の倫理的批評にない。イエス御自身の自意識に在る。

イエスは自己について少しも罪ある事を認め給はず、一度も悔ひ給ふた事がなかつた。若し眞に俯仰天地に慚ぢずと云ひ得た人があるならば、それはイエスである。此の事は實に驚くべき事である。

何となれば人は高められれば高められる程、自己に對する道德標準が高くなり、良心は敏感となり、少しでも此の標準に達しない自己を見出すや、之に對する批判は峻厳となり、少しの瑕疵も容赦しなくなる。英國の宰相グラッドストーンは女中を叱かつたために三日も憂鬱に陥つたと云ふ。我等が潔められるだけ、それだけ益々自分

の不淨が明瞭に看取せられ、若しも少しでも神の聖意に背戻せば、其の犯した罪はいつまでも忘れる事は出来なくなる。我が罪は常に我が眼前に在つて我等を苦しめるのである。假令他人は之を看過しても、自分はいつまでも自分を赦さない。常に責める。千歳の下、聖者として仰がれるパウロは嘆いて云つた。

われは律法は震なるものと知る。されど我は肉なる者にして罪の下に賣られたり。……我はわが中、すなはち我が肉のうちに善の宿らぬを知る。善を欲すること我にあれど、之を行ふことなければなり。……わが肢體のうちには外の法ありて、我が心の法と戦ひ、我を肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る。噫、われ惱める人なるかな、此の死の體より我を救はん者は誰ぞ（ロマ書七・一四以下）。

而して彼は「我らの主イエス・キリストに頼り」始めて之から解放された事を神に感謝した（七・二四）。

然るにイエスは始めから終りまで未だ一度もかやうな罪の苦悶の聲を發し給ふた事はなかつた。彼は人の心の

奥底を洞察する靈眼を有し、外は端正なる君子人、花の如き佳人にも、「内は死人の骨とさまざまの穢とに滿つ（マタイ傳二三・二七）るのを看逃し給はなかつた。僅かの眼の球の動き、顔面筋肉の運動にも、淫蕩、虚榮、惡意陰險、兇惡を推知し給ふた。「凡ての人を知り、また人の衷にある事を知りたまふた」。（ヨハネ傳二・二四）。彼程の罪に敏感な者が、自分自身の中に少しも罪の存在を意識し給はなかつた事は眞に驚嘆すべきことである。パリサイ人も亦他人の罪には敏感であつて、自分の罪には甚だ鈍感であつた。然し乍ら、イエスはパリサイ人と全く異なつて、自分の罪に盲目であつたのではない。何事にまれ、彼が言ひ、彼が行ひ給ふた事は常に鋭敏なる良心の承認があり、神との全き一致に由つたためである。

イエスの良心は常に天日に照されて少しの陰影もなかつた。此の事は我等罪人が神から其の罪を赦された事を心から自覺した時、稍之に類するものがある。ダビテの歡喜、パウロの感謝の如きはそれである。然らばイエスも一度は罪の苦悶があつたのが、悔改めのバプテスマを

受け給ふた時、幼時からの罪が一切赦され、天開け聖靈降下して此の明朝を得給ふたのではあるまいか。

否、イエスは幼少の時から少しも罪を犯し給はなかつた。其の證據には、彼は罪を悔ゆる必要がなかつたのみでなく、彼は世の罪を審き、又之を赦す權威を有ち給ふた。若し其半生に少しでも罪を犯した者ならば、假令神に由りその罪は一切赦され、青天白日の身と看做されたとして、自分が神に代つて人の罪を赦し、又之を審く事が出来やうか。人の罪を審き得る者は、最少限度に於て其の者自身は過去にも現在にもはた將來にも罪を犯す事なしと確信ある事を必要とする。イエスは人に教えて「なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるべし」(マタイ傳七・一、二)と云ひ給ふた。然かもそのイエスが

父は誰をも審き給はず、審判をさへみな子に委ね給へり(ヨハネ傳五・二二)

と明言し給ふたのである。イエスが人の罪の審判主であるとは、決して彼は只單に人間の理想の典型であり、人

は皆彼を標準として眞價を定められるとの謂ではない。

彼は末の日に綿羊と山羊とを分つやうに、善人と悪人とを別ち、一方に「世の創めより汝等のために備へられたる國を嗣げ」と云ひ、他を「惡魔とその使ひとのために備へなれたる永遠の火に入」らしめ給ふのである(マタイ傳二五・三一以下)。自分に少しでも罪を犯した意識があつたならば、どうしてかゝる事が云ひ得やう。

然り、イエスは我等の罪を審き、又之を赦し給ふ權威を有ち給ふた。嘗にそれのみでなかつた。彼は我等罪人の罪の贖償となるために來たと云ひ給ふた。

人の子の來れるも、事へらるゝ爲にあらざらず、反つて事へることをなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與へん爲なり(マルコ傳一〇・四四)。

モーセの律法に由れば、罪の贖償として献げる犠牲は完くして疵のない生き物たることを必要とした。然かも此の律法に「循ひて献げたる供物と犠牲とは、禮拜をなす者の良心を全くすること能はざりき」(ヘブル書九・九)。我等の良心が神の前に罪の赦された事を自覺し、最早一

點の陰影を留め得ないまでに晴朗となるには、完全な動物の生命を献げたのでは足りない。自分自身を献げなければならぬ。否、それでも尙足りない。未だ嘗て一度も罪を犯した事のない者が、我等に代つて己が生命を犠牲として神に献げ、我等に代つて死したならば、其の時から始めて我等は神の前に完全に過去一切の罪が帳消しとされ、最早毫も之について思ひ煩ふ事のないやうになると感し得る。それ迄は我等の良心は我等の罪を赦さない。而して神も亦我等の罪を赦し給はない。

イエスが若し我等と同様に少しでも罪があり、その前半生に僅かでも罪を犯し給ふた自覺があつたならば、何の鐵面皮を以て、彼は我等の贖償あかひとして己が生命を我等に與へんため來れりと云ひ得たであらうか。こんな「埒を乗り越した野心」誇大妄想は又と世にない。

完全なる品性の内容

然るにイエスの生涯は一言以て之を云へば、謙遜と愛の御生涯であつた。之が只一回も罪を犯さず、神の聖意

を完全に顯はし給ふた積極的内容である。

凡て勞する者、重荷を負ふ者、われに來れ。われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ひくければ、我が軛くびきを負ひて我に學べ。されば休息やすみを得ん。わが軛くびきは易く、わが荷は輕ければなり。(マタイ傳一・二五以下)

古來嘗てイエスの外に誰か自己についてかやうな崇高壯美な言を發し得た者があつたか。「我は柔和にして心卑ひくし」。何人も我と憐なり得る。而してその者の受ける束縛は易く、その負擔は輕い。否、我は其の者の束縛を自ら受け、その負へる重荷を偕に負ふて、彼等に眞の休息を得させる。されば人生の重荷に苦しむ者、堪え難き惱みに悶ゆる者は我に來れと。如何なる聖人も、英雄もかく言ひ得る者はない。天に達する崇さ、その威嚴、然かも何人の荷をも偕に負ふ謙遜と愛。アレキサンデル大王シーザー、ナポレオンも此の休息を人に與へず、孔子、釋迦、ソクラテスもかく宣言する事は出来ない。

然り、イエスは謙遜であり給ふた。其の才能と智慧とを以てせば、エルサレムに於て最も顯榮の地位を得、天

下に號令し給ふ事は容易であつた。然るに彼は殊更に之を避け、ガリラヤの湖畔に無知なる漁夫漁婦を集めて之に教え、その病を癒し、人々の損斥する取税人を弟子とし娼妓の友とまで悪評されるのを甘受し給ふた。而して最高の眞理を彼等に傳へ給ふた。

天地の主なる父よ、われ感謝す。此等の事^{かしこ}者、慧^{さとし}き者にかくして嬰兒^{みどりご}に顯はし給へり。父よ、然り

斯の如きは御意^{みこころ}に適^{かな}へるなり(マタイ傳一・二五以下)
ヨハネ傳はイエスを「人の子」として示すよりも、寧ろ彼が神の子たりし事を證することをその主なる目的として書かれた書である。それ故「人の子」たる彼の御姿は、神の子たる御光のために遮ぎられて稍稀薄となつて居る觀がある。然るにも拘はらず、ヨハネ傳はイエスの謙遜について、他の福音書に見出す事が出来ない著しい記事がある。弟子の洗足がそれである。

イエス、父が萬物をおのが手にゆだね給ひしことと
己の神より出で神に到ることを知り、夕餐^けより起ち
て上衣をぬぎ……弟子達の足をあらひ、纏^{まと}ひたる

手布にて之を拭ひはじめ給ふ(一三・三以下)。

驚くべき謙遜である。その謙遜は、光明皇后が乞食の體を洗ひ、水戸黃門が農夫の姿にて下民の窮狀を訪ねた比ではない。天地萬物の支配者、神と本質を同じうする者が、人となり、僕となつて、卑しき我等の足を洗ひ給ふたと云ふのである。

彼は實に民の罪^{あがな}を贖はんために凡ての事において兄弟の如くなり給ふたのである(ヘブル書二・一七)。それは我等に對する限りない愛に伴つた謙遜であつた。世には愛の人がある。然し乍ら凡ての愛は必らずしも謙遜を伴ふものではない。我が國に親分なる者があり、然諾を重んじ、一度自分の許に來り投じた者のためには自分の生命を擲つても之を助けることを辭しない義侠心をもつ。然し乍ら、彼はかくなしつゝ甚しき優越を感じ、イエスの如き謙遜はない。

イエスの愛は只單に我等の惱を醫し、貧しきを賑はせ病を癒し給ふた程度^{ほど}の愛ではなかつた。彼は己が尊き生

命を我等のために棄て、罪のため神から離れ、滅びやうとする我等を再び神の恩恵の許につれ來たり給ふた愛であつた。然かも此の愛は我等に少しも理解せられず、今に至るまで感謝されず、却つて無視され、憎まれ、裏切られ、棄てられ、嘲けられ、唾きせられ、打たれ、十字架に釘けられ乍ら、少しもひるまず、損ぜず、寸毫も我等から離れずして、遂に我等の永遠の救の磐となり給ふた愛である。何等の謙遜、何等の愛ぞ。

我等は此の天地がかゝる愛に由つて創造され、イエスに由つて我等の眼前にそれが顯はれ、彼の愛の中に、彼の完全なる人格が我等の物となり、神を父として仰ぎ奉る神の國に入り得る。イエスは實に此の意味に於て「人」であり、神の國の萌芽、その根本原理であり給ふのである。

八 神の子

凡ての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者に父の外になく、父をしる者は子、また子の欲するまゝに顯はす者の外になし（マタイ傳一一・二七）。

神は「その像の如く」人を創造り給ふた（創世記一・二七）。その像とは何か。神の意中の人、完全なる人格、「神の子」即ちイエスである。「御子は神の榮光のかがやき、神の本質」（ヘアル書一・三）と云へるがそれである。此の「神の子」の地上出現に由つて、我等は我等の創造された理想の典型、其の到達すべき目的を見た。

私は神の國の典型にして其の萌芽であるイエスの人格の完全、その品性の崇高、その謙遜と愛とを述べた。而して此の人格の完全は彼が人として全く罪なく、凡ての誘惑に打ち克ち、寸毫も父なる神の聖意から離れず、悉く之に服従し、全く神と一つであり給ふた事に其の根源

がある事を述べた。實に彼の品性の崇高壯美は神との完全なる一致の結果、神の至聖の發露に外ならない。彼とその父なる神との關係を除外して、イエスの完全なる人格、即ち「人の子」はなく、従つて「人の子」の出現に由る神の國は存在しない。されば、私は進んで彼と彼の父なる神との關係、即ち、之を言ひ顯はす「神の子」について語らねばならない。

子たる神の意識

イエスは神と密接不離の關係に立ち給ふた。彼が子供の時から「我が父」と呼び給ふた神と彼との關係の親しさは、如何なる人との親しさも遙かに及ばず、呼吸する氣息よりも密接であつた。彼は云ひ給ふた「我と父とは一つなり」(ヨハネ傳一〇・三〇)と。

然し乍ら、その事は神はイエスの外になく、イエス即神であると云ふ意味ではない。彼は明に父なる神と自分とは互に獨立し相對立する存在である事を意識し給ひ、神を父と稱び、自らその子として之に絶對に依屬し、信

頼し服従し給ふたのである。

天地の主なる父よ、われ感謝す。此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顯はし給へり。父よ、然り、斯くの如きは御意に適へるなり。凡ての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するまゝに顯はすところの者の外になし(マタイ傳一・二五—二七)。

之は實に驚くべき自己宣言である。天地の主宰者なる神を父よと呼び、我を知る者は、即ち、眞實我の何者たるかを知る者は、此の「父の外になく」、神を父として知る者は只我あるのみ、而して我が「欲するまゝに」之を教へ、其の靈の眼に顯はすところの者の外にはない。人は何人も生來のまゝにては父なる神を知ることとは出来ない。只我に招かれ、それが啓示を受け、新に子とせられて之を知り得ると云ふ。

されば神との間の父子の關係は、イエスとその父なる神との間に存在し、イエスに由つて始めて我等に示され我等をもその關係に入られるのである。そこに新創造が

行はれるのである。彼の神に對する關係は同性質の關係であり、我等に對する關係は、創造者と被造物との關係である。「凡ての物はわが父より委ねられたり」、天地萬物、殊に我等の靈魂と身体との運命は彼の手中に在る。地上如何なる人間がかかる言を發し得やうか。イエスは我等が神の子とせられる意味と異つて、獨特の意味で「神の子」即ち神の獨子であり給ふ。彼は言ひ給ふた。

わが父は今に至るまで働き給ふ。我もまた働くなり

(ヨハネ傳五・一七)。我みづからは何事もなし能はず

(五・三〇)。わが己によりては何事もなさず(八・二

八)。我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命

を捨つ。……我ふたたび生命を得んために生命を捨

つ。……人これを我より取るにあらず、我みづから

捨つるなり……我この命令をわが父より受けたり：

…我と父とは一つなり(一〇・一一、一七、一八・三〇)

イエスが父なる神と一つであり給ふのは、彼みづから何事をもなし能はず、父なる神の聖意に絶対に服従し給ふたためである。

アバ父よ、父には能はぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給へ。されど我が意のままに成さんとあらず、御意のまゝに成し給へ(マルコ傳一四・三六)。

此の絶対服従の結果、彼は「凡ての物を我わが父より委ねられたり」と云ひ給ふたのである。而して又

我を受くる者は我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり(マルコ傳一四・三七)

と確言し給ふたのである。そして此の絶対の服従があつて、父なる神も亦彼に云ひ給ふた。

なんぢは我が愛しむ子なり。我なんぢを悦ぶ(一・二)

此の聲は變貌の山にても亦再び聞えた。

これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聽け(九・七)。

此の御言に由つてイエスの心の奥底に、世の創造の前からイエスは特別の意味で「神の子」であるとの自覺が益々強まり、イエスに付き隨つた親しき弟子たちにも亦その確信が生じたのである。

永遠の存在の意識

然るに更に驚くべきことは、イエスは明に自己と父なる神との父子の關係は此の地上一時の關係でなく、此の世の創造前から、即ち永遠の世界に於て既に父なる神と偕に存在したとの自覺である。イエスがユダヤ人に「人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし」(ヨハネ傳二・五二)と云ひ給ふた時彼等は「今ぞお前が氣違であることが明瞭した。アブラハムでさえ死んだのに、自分が死なないと云ふばかりぢやない、自分の言を守る者まで永遠に死なないと、何たるたわけの言か」と嘲けつたその時イエスは答へ給ふた。

まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり(八・五八)。

彼は又彼を裏切る者の手に由つて賣られ、十字架に釘けられやうとする前夜、親しき弟子たちと最後の晚餐をなし、終つて彼は祈り給ふた。

父よ、まだ世のあらぬ前に、わが汝と偕にもちたりし榮光をもて、今御前に我に榮光をあらはし給へ。

……父よ。望むらくは、我に賜ひたる人々の、我

が居るところに我と偕にをり、世の創の前より我を愛し給ひしによりて、汝の我に賜ひたる我が榮光を見んことを(ヨハネ傳一七・五、二四)。

此等の祈はヨハネ傳記者の思索ではあるまい。ハルナツクは云つた。之は直接イエスの御口から出て、傍に居た弟子たちが之を聞いたものであらうと。ナザレの大王の子イエスは、此の天地創造前、永遠に神と偕に在り、その地上の出現は「神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反つて己を空しうして僕の貌をとりて人の如くなり……人の狀にて現はれ」給ふたのであつた(ヒリヒ書・六一八)。彼が神に「まだ世のあらぬ前にわが汝と偕にもちたりし榮光をあらはし」、弟子たちに之を見せしめ給へと祈り給ふた祈は聽かれた。ヨハネ傳はキリストの十字架の死と復活とがその榮光の顯現とする。更にパウロも亦彼が「既に人の狀にて現はれ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給ふ」た事に由つて彼の復活に於て現はれたと云つた。

この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさ

る名を賜ひたり。これ天に在るもの、地に在るもの
 悉くイエスの名によりて膝を屈め、且つもろもろの
 舌の「イエスキリストは主（エホバ）なり」と云ひあ
 らはして、榮光を父なる神に歸せん爲なり（ピリピ書
 二・九一—二）。

生れ出でぬ前、既に永遠に神と偕に在すとのイエスの
 自覺は一体何時頃から彼に在つたであらうか。ベツレヘ
 ムの馬小屋、馬槽の中で既に之があつたとは考へられな
 い。多分それは彼が多くの人々に迫害され、遂に十字架
 に釘けられ給ふまで罪人らと衝突し給ひつつ、益々彼は
 此等の罪人に對する自分の愛の如何ばかり強いかを自覺
 し給ふた時に於てであらう。此の愛は神に對する絶對の
 服従、神の聖意と一つである事から彼に湧き出た。而し
 て此の愛に由つて建設し給ふ彼の國の御業は神の永遠的
 事業であることを感ずれば感ずる程、彼の存在其の者が
 只地上の生涯を以て始まつたのでなく、永遠に父なる神
 と偕に在し、今神から遣はされて地上に出現し給ふた事
 を益々固く確信するに至られたのであらう。

此の確信は彼が罪人を愛する餘り彼等の罪を己が身に
 負はんとしてバブテスマを受け給ふた時「なんぢは我が
 愛子なり」との御聲を聞き、更に人の罪の贖のため十字
 架に死する時の來れるを知りエルサレムに上らんとして
 變貌の山にて再び此の聲を聞いて益々之を深め、死は愈
 々明日と云ふ最後の晚餐の時の祈にて更に深く之を感じ
 給ふたのであらう。

眞のメシヤ

イエスはかやうに神に對して特別の關係を有ち給ふた
 彼が世の創造前から、永遠に父なる神と偕に存在し、「時
 満つるに及びて」神に遣はされて此の地に出現し給ふた
 との自覺、父なる神の外己を知るものなく、自分の外に
 又自分の欲するままに之を顯はす者の外は、眞の神を知
 る事なしとの確信、天地萬物殊に人間の靈魂と身体とは
 悉く父なる神から之を自分に委ねられた事の信念、之は
 到底朝に生れ夕に死する弱い肉なる人間の感じ得ず、有
 ち得ない自覺である。

此故に私はイエスの中に明に「神性」を看取し得る。イエスは此の意味で「神の子」であり給ふのである。彼の出現に由つて神は明かなる御姿にて私に臨み、彼の中に在つて、神が真人イエスの御父であり給ふ事を示し、私を真人としてイエスの有ち給ふ父子の關係に入れしめ給ふのである。

私はイエスは「神の子」即ち、完全なる「神の榮光」かがやき、神の本質の像かたであり給ふた事、又他面、彼は「人の子」即ち、完全なる眞の人であり給ふた事を述べ、彼を受け、彼の謙遜と愛とに由つて彼と一つになる時、我等は始めてイエスの御父なる神を我等の父とし、「アバ、父よ」と呼び奉り、神と父子との關係、即ち、神の國に入り得る事を語つた。

然り、イエスと一つになる事に由つて我等は彼の御父なる神を父とし奉る事が出来る。彼の中に在つて子となり得る。然るに人は皆罪人である。神の子でないばかりか神に對して罪を犯し、惡を爲しつゝあり、此の儘放置されれば私は身も魂も滅亡するより外はない者である。

さればイエスが此の罪人なる私と一つになり給ふと云ふ事は、私の罪を己が物として之を除き給ふことではなければならない。又神が私を子とし給ふには先づ、私の罪を赦し、自由に神に近づく者とし給はねばならない。

換言せば、神が我等の父であり、我等が神の子となるところの神の國の建設は、眞の神を我等に示し給ふばかりでなく、我等の罪を處分することを要する。神に對する我等の罪が全く赦されて、始めて我等は全く自由に神に近づき得、神も亦自由に我等を愛し得て、我等に聖靈を注ぎ、聖なる神の子たる生命を與へ給ふ事を得る。此の故にイエスが我等を神の子とし給ふには先づ我等の神に對する罪を贖あがなひ給はねばならない。彼は此の贖罪を十字架の死に由つて成し遂げ給ふたのである。

實に彼が苦難の死に由つて成し遂げ給ふた我等の罪の贖こそは、イエスの降世の主眼であつた。彼の宣教、彼の憐憫の御業は一つとして之に關係しないものはない。かくして彼の地上の全生涯は、我等の心を啓き、イエスの中に在し給ふ神の御姿を我等に示し、我等の中な

る罪の赦しを得させ、イエスが世の創めの前より有ちたまふ神との父子關係を我等の中に創造し給ふた。「人もしキリストに在らば新に造られたるものなり。古きは既に去り、視よ、新しくなりたり」(コリント約書五・一七)。

古來如何なる聖人賢者がかゝる神を我等に示し、我等の衷に神とのかかる關係を創造した者があつたか。如何なる英雄豪傑がかかる神の國を地上に建設したか。天地萬物の創造主たる神が我等の支配者であると云ふ丈ではなく、我等の父であり給ひ、蟲にも等しい我等が神の子として永生を享受し得る神の聖家族の出現、之れイエスが神の子にして人の子として成し給ひ、將來之を完成し給ふところのものである。かゝる永遠的の大事業を成し遂げ給ふ者は凡^{たゞ}の人ではない。必ず神御自身でなければならぬ。まことにイエスは眞の神、而して眞の人、否、眞の神が眞の人となつて我等に臨み給ふたものである。

神が父であり給ふことの 原因と結果

神が我等人類の父であり給ふ原因は信仰であります。我等は信仰に由つて神に義とされるとはそのことを云ひます。信仰とは疑もなく、キリストを信する信仰です。我が全生を擧げて彼に信賴することです。而して義とされるとは神と義しい關係に立ち得ること、即ちイエスの御父を我等の父とし得ることであります。天地萬物の創造主を我等の本當の父とし得ると云ふ位大きな喜、満足、將來の希望が他にあるでしょうか。

我等の多くは今經濟界の不況で途方にくれて居ます。それ故智慧も能力も正義もない政府に我を救へと號んで居ます。又一度病氣すると醫者よ薬よと大騒ぎします。何故萬物の創造主、我等の生命の源である神に求めないのですか。それは神を父としないからです。

一切の人生の善き事は神が我等の父であり給ふ結果として來ます。其の原因はキリストを信する信仰です。

無益なる僕

(ルカ傳十七の五—十)

森本慶三

ここに無益なる僕とは「入用なき奴隸」の意味であります。何故爲すべき丈の仕事をしたる者をば、かくも不要無價値なる奴隸と呼びなすのでありませうか。イエスが此譬を以て教へんとなし玉ふ眞意はどこにあるのでせうか。之を至細に學び考へることは、信仰上大切であると思ひます。

「我等に信仰を増し加へ玉へ」と願ひ出でたる使徒達の心意、及び彼等が信仰そのものに就て懐ける考想の中に、棄て置き難き誤謬と危険の潜在せることを觀破して之を訓戒し玉ふたるものが、イエスの此教説にして其結末の「無益の僕云々」の一句こそ、全体の主眼點であります。併しこの過誤は獨り當時の使徒達のみには止まりません、また我等の度々陥るところであります。

そも／＼我等が信仰の増加せんことを願へる其眞意、

其目的は那邊にあつたでせうか。思ふに彼等は普通では容易に出來難いといふ程の事を仕出かして、神にも人も賞讃を博し、又自分等自身にも満足を得たいといふ様な、心の動きがあつたことを想像されます。我等が普通に信仰が足らぬとか、弱いかいふときには、どうも自分の道徳徳行がまだ／＼不充不充分であるといふことを意味して居ります。従つて人の目を引く様な善行をなし、自分の心を喜ばす様な善心を生ずる爲に、所謂信仰を増してもらひたいと願ふのであります。これは一見聖い願である様ではありますが、そこに又大なる過誤と危険が潜在して居ることに氣付かねばなりません。イエスは使徒達に此事を曉らせんとて、此譬を語り出で玉ひしものと思はれます。

如何にも信仰があれば、桑樹に抜けて海に入らしむる様な難事も出來、奇蹟も行ひ得られませう。而しそくいふ行を爲さしむる信仰とは果して如何なるものでせうか。一概に信仰／＼といふものの、其信仰の内容本質を果してよく曉得して居るでせうか。人は往々信仰とは德行か

善心の別名である如く思ひ、又は徳行や善心となつて顯はるることが信仰の必然の結果である様に思ひ易くあります。然れども信仰は必ずしも人が考へ又願ふ通りの結果となつて顯れると限つたものではありません。時には何等自分にも人にも、これぞと言ふて認めらるる程のものを顯さず、無言の沈黙、無爲の忍従で終ることもあるのであります。信仰はもと／＼神を喜ばし奉るものであつて、直接に人をも己をも喜ばすのが目的ではありません。信仰は行ふことや、喜ぶことではなくて、従ふこと任せることが主であります。

今この光を以て人間の道徳善行を吟味して見ませう。よしそれが信仰に基きて爲されたる奇蹟の大事業であつたにしろ、信仰そのものは神を喜ばし奉るに足りませうが、その結果たる行爲そのものは何人も人の功績として、賞揚すべきものではありません。これは其の人の信仰を通じて、神の働き玉ひたるものであつて、人は單なる用具、一介の奴僕たるに過ぎませぬ。其場合に讃めらるるものは、神にして人ではありません。

汝等何ぞ我等が己の能力と敬虔とによりて此人を歩ませし如く我等を見つむるか(使徒行傳三の十二)

と言ふのが正當であります。然るに若し其行爲に就て、何か人に少しでも價値あるものの様に考へては、大變な間違になります。まして普通の善心徳行に於てをやであります。信仰の本質、信仰と行爲との關係を、よくわきまへて居らぬと、こゝの區別を過るのであります。こゝにイエスが使徒達を戒め玉ひしは、實に此點であつたらうと思はれます。

信仰より出づる言や、信仰より來る行は時に奇蹟を行ひ得ませう。併しかゝる信仰は全く己を無にしたる純眞の信頼でなければなりません。自ら我には信仰ありと自惚る如き信仰は、決して純眞なものではありません。それはもはや信仰なき状態にあると言て然るべきです。純眞なる信仰は決して自ら奇蹟を行ふなど思ふ心ではありません。只自己を全く無用の奴隸として(行爲の點に關しては)神の命のまゝに、無條件、無要求に働くものです。奇蹟の爲に信仰を求むのは、未だ信仰そのものゝ

本来の性質を知らざるが故です。イエスは言ひ玉ひます
汝等信仰を求むるか、信仰とは自分を全く無用の奴隷と
認むるに至ることを知らねばならぬと、これがこの教話
の眼目であると思ひます。

我等人間としては、神より命ぜられしことを皆爲し終
へたとて、これは當然のことであつて、之を以て特別に
神より報賞を期待したり、要求したりする價値も、權利
も、資格もあるべきはづのものではありません。神が嘉
みし玉ふのは、我の如き者は、神の御目には、有つても
無くてもよい、不必要、無用の奴隷であることを自覺し
て、全然無條件、無要求、無期待にて、神に信従すると
いふところにのみあるのであつて、何か行ふたり、念ふ
たりするその點に於てではないのであります。

かふいふ卑下信従の心になり切つたときには、今度は
神の方からは善且忠なる僕として、主人の歡に入れ玉ひ
(馬太二十五の二十一)、或は主人自ら進んで給仕し給ふ
(ルカ十二の三七)のでありませうが、之は人の方面よ

りは、全然期待したり要求したりすべき筋合のものでは
ありません。もし何か我の方にも取り處があり、我も
神の爲にはかく／＼爲せり、かゝる愛心を顯せり、故に
我も天國にては一廉の報賞にあづかり得べしなどと期待
し居るならば、却つて意外にも、無益の僕として外の暗
黒に投げ出さるの憂目を見ることでありませう(馬太二十
五の三十)

馬太傳二十五章一四―三〇や、路加傳十二章三五―三
七、と此處とは一見矛盾して居る様に思はれますが、こ
の兩處の關係は斯様に解すべきではないと考へます。即
自ら無益の僕と認むるものは、忠僕として賞され、自分
は有用の材と恃めるものは、實は神國にありては用のな
き無益の僕として斥けられるといふのです。自ら高ふす
るものは卑ふせられ、自ら卑ふするものは高めらるるの
であります。

自らを無用の奴隷と認識する心には、そこに毫も何等
の報賞を期待する何物もあるべき筈はありません。何を

も求めざる心が即信仰の特徴です。其時もし何か受くるものありとすれば、其は只恩恵とし受くるまででありまして、決して之を報賞として受けたりとの意識は存しません。人が神に義とせらるるのは、人がかゝる心を、神に對して有つたときに限ります。神の前に少しでも己が價値を意識する様な心があつては、其瞬間に純眞な信仰は損はれて終ひます。神が最も喜び玉ふのは此心即純眞なる信仰でありまして、この處に必要に應じて、神の力が働きて、時には奇蹟となつて顯はるるのであります。此心を失はずして、神に従ひ、神を愛する赤心より自らにはそれとは氣付かずして、命ぜられた以上のことを爲し、五タラントの上に更に五タラントを得る程の事が出来た時に、神はその五タラントに對して、多くの物を掌るほどの意外の報賞を賜ふであらうが、自分は矢張り依然として無用の僕、それを受くるほどの價値あるものではないと自覺して居りますから、そこに何等自負驕慢の心は起り得ないのです。その時若しもかかる慢心が起つたら、忽ち急轉直下無信仰の状態に逆退します

恐るべく、慎しむべきです。故に人の側としてはどこまでも、いつまでも、無用の奴隷と自覺すべきであります。信仰が進めば當然かくなるべき筈であります。信仰はかゝる特質を有つて居ります。一タラントを受けし僕が一タラントを死藏したることは、主人の爲に自己が最善と考へたる所を爲したるものにて、自分は忠實なる僕と自任して居つたでせう。故にその死藏といふ怠慢的行爲よりも、寧ろ其自恃自任の心こそ、却て無用の僕として排斥さるるに至りたる大なる欠陥であつたと見られます。

かくの如く人間の善心德行そのものは、神の前には、天國に於ては、左程價値あるものではない。その善心その徳行を産み出す信仰そのものが貴いのであります。普通道徳にありても、行爲よりは精神が大切である如く、宗教の世界にありても、所謂善心德行又は奇蹟よりも、心の奥に潜める信仰そのものが尊ばるゝのであります。其信仰とは飽くまで己の無價値なることを認めて、救の爲には只イエス、キリストに頼りすぎるの外には絶対に

其途なきことを知りて、一途に信頼の道を辿り行くものであります。よしや信仰増進の結果、かゝる奇蹟が出來たりとて、之によりて信仰の進歩に得意がるべきではなく却て其行爲の別段賞讃さるゝ程の價値なきことを自覺すべきであります。信仰が増せば増すほど、自己の無用なることを認識することが益鋭敏になるべきものであります。

人間の行爲心事はよしや人の目には、如何ほど偉大崇高に見へても、それに何か神に義とせらるるほどの資格があり、天國にて嘉賞さるゝに足る有用の價ありなどと考ふることは、絶対に過誤であつて、そういふ事に役立つものは全く己を頼まざる謙卑信従の外にはありません人間は何を爲しても、何處まで進んでも、少しでも自己を恃む心がありては、神の義を受けて、神に嘉納せらるゝものとしては、無價値、無用の奴僕に過ぎぬものなることを最強く最明に承認すべきであります。此眞理を知るのが人として、ことにイエスの弟子として最先に爲さねばならぬことであります。己れ自身を知ること、然り

自己の無價値を認めることが人間の最大發見と言はねばなりません。信仰の増すといふことは、自己認識としては自己の無用の僕たることを知ることであつて、之によりて偉大なる仕事、善美なる道念が出來たか否かといふことには關係しません。信仰は畢竟ここに其端を發し、終にこゝに歸着すべきであります。これが信仰の正路にして、此途に由らざるものは皆邪信といふべきであります。イエスが信仰を教へ玉ふの用意實に深甚なりといふべきであります。

(附記) 故内村先生が嘗て今より三十幾年前角筈の自宅にて、此處の講義に於て申されました。「我等は皆無益の僕である、爲すべき事を爲したるに過ぎざるばかりか、實は自ら省みて、爲すべきほどの事さへ爲し得ざりしものである。我等は多分此世を去るときには「主を我を赦し玉へ、爲すべきことを爲し得ざりし其罪を」と、ひたすら、主の御前に憐憫を乞ふのであらうと」私は今に深く此事を心に刻めるものであります。

柏木通信

(第廿四信)

齋藤宗次郎

柏木の近状

都の秋は深み行く、残んの森を索ねて秋晴を讀ふ小禽の歌も懐かしい。庭の落葉は朝毎に其數を増して梢を謝する一葉々々に天然の春、人生の春、民族の春の豫言が彫まれて、讀み得る人に強き希望を興へる。尊きかな宇宙を統べ給ふ神の御心。○民心の枯渴を甦らす内村全集の水源たる七坪の小湖は、最近少からざる巡禮の客を迎へた。東京女子大の戸塚二三枝子さんは大賀博士夫妻の案内にて入り來り、恐る々々其成因水量水位深度透明度湖盆段丘等限なき見學を了へて後、これぞ靈界の國立公園なりと呼んで去つた。阪神の燈臺を支ふる入間田氏は愛すべき謙讓の姿を中央の椅子に托して見聞の一つ々に盡きざる興趣を懷き、恩師在りし日の追憶に伴ふ謝恩の涙をさへ灌いで辭した。仙臺某高女教師宮崎姉は貴重なる書翰十餘通を提供せられし後、余が

全集編輯の順序を實物に就て説明せしを謹聽し、神の業は斯くして成るものかと感歎措く能はざる様子を示して歸つた。彼女と前後して南洋ジャバ島の加藤氏は訊づれた。豊頰に微笑を湛え、膝頭を撫しつゝ無言を續くること多時、蓋し無量の感慨は發するに言葉なく緘黙の外無かつた爲であらう。互の心中には贖罪の實驗に對する感謝と現在の聖業を目撃する歡喜と將來を開拓する希望とは燃ゆれど、暗黒の間に臆解が通ふが爲に敢て多辯を費すの要はなかつた。以心傳心の妙態は人生に望ましいことである。記念のためとて余の惡筆二枚を衣囊に收め再會を期して別れた。二十年間故國の霜を踏みし事なき氏は、又も白露降霜を見ずして歸島せねばならぬことを惜むものゝ如くであつた。神は屢々此等の教友を送つて喜びを偕にせしめ給ふを感謝する。○十月中旬互に苦杯を味ふ全集編輯會議を聞くことゝなつた。誠に豫想せざる痛心事であつた。全集第七回配本の粗漏發見に因つて一同責任を感ずることゝなつた。如何なる缺點なるか、それは卷末近き二頁の入れ違ひのみ、製本し配本せしこと

であつた。岩波書店あつて以來の失態なりとて主人始め主任の驚きと恐縮とは大なるものであつた。特に印刷所長の責任感はその極に達し、如何なる犠牲を拂つても此失策に對して償ひの實を現はさねば濟まぬと陳謝至らざるなしであつた。然し實際其故障の原因を調べて見ると、業務繁激の間に分業上より起りし微細の差異が二三工程を進む中に成りしものであつて、過失の中點を指摘し得ざる程の事であつた故に、我々としては實に氣の毒に堪へざることであつた。兎に角讀者に對して急遽最善の方法を執ることを熟議決定した。尙更に二三要件を諮つて順調に進み行く道を講じ前途を只管主に委ねて散じた。

日曜日の集會 安息日は弱い人間の爲に造られし神の恩恵である。人の爲であるが故に一切の亂用を斥けて之を聖守するは困難である。今日まで人間の勝手なる制定によつて何れ程潰されて來たか知れない。神に對しては讚美感謝、兄弟に對しては愛の一致、世に對しては祝福の祈求、己に就ては全き放棄、然も凡てが清く自由に行はれねばならぬ。而して其悉くを主の御力にのみ仰ぐ

時に正しき道は與へられる。願れば我等は其精神其方法を堅實に守るの憐みに預るを以て本當に有り難く思ふ。

一、野の百合 大賀一郎

一、新生の感謝 鈴木敏元

一、ミカ書研究 大島正健

一、信 仰 秋元梅吉

一、啞の靈に憑かれし子の父 山拵儀市

花巻小集會 余は二三日の暇を乞ふて余の懐かしき

故園の地に入つた。此處に於ても小さき集會の恩寵に浴した。親友照井氏は余が曾て十數年間起臥せし屋舎の二階を會場と定めて今か今かと待ち構へて居つて呉れた。農聖人の綽名ある工藤氏は赤松繁る山地を出で、ヨルダンならぬ北上川を渡り來つてメランクトンの様な顔を見せ、盛岡からは郵便局の水野赤十字病院の丸山兩氏馳せ參じて思はぬ時に野人の集りは聞かれた。歌も祈も感話も熱と力を以て貰かれた。余が内村全集の刊行に於ける驚くべき神の攝理を述べし時には一同眼に涙し膝を壓する拳を固めて傾聴に入つた。彼等はいかばかり此事業に

注目して同情援助の心に溢れて居たかが判つた。次に同志が世に向つて全集の紹介に苦心せし實驗談を聞いては余にも亦感涙なきを得なかつた。此全集の事業の爲に神聖なる美譚は國の到る所に醸されて天命に生くる日本は漸次に培はれ行くを見る。壁下に坐して熱心に之を聞き居たる家主の小枝子さんは、名物の胡桃團子と美果とを以て此忘れ難き會合に興を添へて呉れた。神の直接の治下を行けば何處に在つても光明と希望とは春の海の如しである。

洗足會例會

九月二十八日夕、雨の恵比壽驛に下車澁谷の田村幸太郎氏宅に集る者十四名、先づ日用の糧の食卓に感謝の箸を納め、それより力強い頌讚の歌を捧げて餘韻を秋雨の暗に響かした。互の心には清泉の湧き出づるを感じた。短くして眞實なる各自の祈禱と感話とあつた。北海道旅行中の有益なる實驗、生命を受けし喜び満洲生活の真相、ザアカイに對するイエスの態度、非常時に處する慰安の恩恵など時に應じて與へられし賜物を順次に述べ畢つて散會した。○十月の例會は武藏野町西

窪なる小坂氏宅に開かる。三鷹驛より北東の村裡に入る練馬大根の畑は見ゆる限りに續いて雑木の森は島の様に浮ぶ。都會人の手足は未だ此邊には充分に伸びない。瀟洒たる新居の階上の窓を開いて靜坐した時には、姦毒の現代を遁れて淳素の太古に還つた様な氣がした。午下二點時の美味なる鮭の中食、天然の美觀に加ふるに、圖らずも大島老先生の懷舊談、名古屋氏の社會の眞相談、寶田氏の飲用水談などの副食物があつて眞に山海の珍珠を感じた。餐後開會、讚美歌について詩篇六十四篇の朗讀をれより一、現代日本に於て本當のものを探すの困難、一、スカルの井邊に於けるイエスの特殊の使命、一、選べるゝ者の少き事と我が生涯の希望、一、アテンスに於けるパウロの態度と歴史を導き給ふ神の力、一、常に醒めて信する所を行ふべし、一、基督に於て一體たる我等の常に懐くべき精神と進むべき道、一、祈禱を忘るの危険等の要旨を骨子とせる有益の感話と數名の祈禱とがあつて眞の聖餐の恵みに預つた。野末に暮雲の變くを見る頃に至り感謝して各々家路に向つた。

身 邊 漫 筆

○今年も亦爲すべき事をなし、楽しいクリスマスを迎へる事が出来る。大なる喜である。絶えず憂慮はある。然し乍ら、それ以上に深い平安がある。神を信ずるからである。私の生活は神まかせの生活である。若し私の信ずる神が神でなくば、私の生活は破綻に終る。然るに神は今年も私の生活を支持して下さつた。雑誌も滞りなく發行し得た。昨年来筆を執つたエレミヤの研究も完成した。今はキリストの研究に没頭して居る。

○エレミヤの研究は私自身には甚だ深い意味があつた。彼を研究する事は自分を研究する事である。彼の偉大と私の微小との相違こそあれ、又神武天皇時代のユダヤ人と現代の日本人との隔りこそあれ、彼にある或る者は私にもあることを發見した。彼について語ることは私自身を擴大して語ることのやうな氣がした。エレミヤの神は私の神である。エレミヤの生涯を創造し給ふた神は又私の生涯を創造し給ひつある。

○私が現在あるやうな生活は、私自身始めからそれを願つたのでも、目的としたのでもない。此の事は私の親しい友人の皆知るところである。先日もある人が「あなたは身体が丈夫であつたならば傳道しないで他の事をやられるであらうと話し合ひましたよ」と云つた。そうかも知れない。私は最初官吏になり、實業家となる事をきらつたが、それ以上に傳道師になる事を心からきらつた私が學校卒業の際何になつても官吏と實業家とはならないときめたに拘はらず、大阪の住友に入つたのは、實はうかうかして居ると傳道師になりはしなまいかと恐れたからであつた。住友をやめて帝大の助教授、即ち官吏になつたのも同様の理由からであつた。

○私は最初住友に入つた事を心から喜んだ。然るに二三年を経過するうちに、私の心中に何物か私ならぬ者の囁く聲が聞えてならない。「お前には他にする仕事があるぞ」。私は問ひ返した。「そんならその仕事は何ですか」。それには何の返事も無い。私は獨り小山に登り、又海邊を散歩して之と問答した。「私自身のする仕事は

現在私の前に置かれた勤を忠實に果すことではないか。それ以外に何があらう」。かく云つて心中の我ならぬ私の聲と戦つた。然るに此の聲は私の潜在意識の中に在つて私を捉へて離さない。私はもて餘した。

○偶々内村先生が講演のため西下され、私の宅に宿泊された。私は先生と松林を散歩し乍ら此の事を打ち開けた。先生は驚いた面持で、「ああ君もか、わしも丁度君の年輩頃にそれで苦しんだよ」。それを聞いて私は嬉しくなかつた。「こりや自分もおしまひには傳道師になるのぢやないか」と當惑した。その頃先生が傳道される事は私には少しの不思議もないが、自分が傳道師になる事程不自然のことはないと思つて居た。

○私は内なる聲の強制に堪えかねて住友をやめた。然し斷じて傳道師にならぬために、一生を學者として眞理の研究に献げ度いと思つて經濟學の教師となつたのである。だが、經濟學の研究は私の主たる目的ではなかつた。執こく私を捉へて離さない内なる聲の正体を見究めることそれが目的であつた。かやうな目的を有つ私が經濟學

者としてどれだけの事が出来るかは始めから疑問である。○處が尙悪い事には、私が大學に移ることが確定した月から私は健康を損じた。到底教師としての義務を忠實に果すことが出来なくなつた。然るにも拘はらず、大學は新參の私に最大限の同情をなし、悠々滿六年間靜養をなさしめてくれた。私が此の間に講義をしたのは二ヶ年しかなく、一週一回の講義であつた。それすら度々休んだ。世界のどこに無能にして無益なる私に斯く寛大なところがあらうか。私は今もその恩を深く感ずる。然し乍ら私は心苦しかつた。私の良心は常に私が義務を果して居ない事を責めた。

○私の苦惱はそれだけではなかつた。此の良心の苛責以上に私を苦しめた者は、私を住友から追ひ出した例の聲である。「お前には大學教授となり、經濟學者となるよりも別に仕事があるのだ」と絶えず囁くその聲である私の良心から義務不忠實を責められ、責められる程私は益々明瞭にその囁きを聞く。「お前の一生の仕事は鐵道運賃が一錢安くなつたならば、民衆はそのためどの位

幸福になれるかと云ふやうな問題の研究でなく、お前自身の存在の根底を探ることだ」と云ふ。私は經濟學研究に手がつかなくなつた。其の頃私の書いた經濟學に關する論文の一つ「富の増進」は私の「聖書の現代經濟觀」に収録されて居る。三谷隆正君がそれを讀んで「君はこの研究に今一層精進されたならばよかつたであらうと惜しく思つた」と書を寄せられたが、其の頃私にはとてもそれは出来なかつた。

○斯く虚弱であつて義務を果さないのみか、心は既に經濟學研究より他の事を思ひつつある私が、便々として大學の好意に甘えて俸給を食ふことが出来やうか。私は斷然辭職を決意した。先づ之を私を大學に紹介してくれた河合榮治郎君に打開けた。彼は極力之を止めた。其の夏彼は輕井澤で内村先生を訪問して其の意見を訊した。先生はやめた方がよからうと云はれ、私に長い手紙を寄せられた。私は先生から云はれなくとも辭するつもりであつたから、早速其の秋辭職を願ひ出で、其の翌年五月休職となり、休職満期と共に辭職と云ふ事になつた。

○私は大學をやめ、經濟學研究を拋棄したが、それは傳道師となるためではなかつた。經濟學の研究をこそ拋棄したれ、一生學究でありたいとの念願は棄て得なかつた。私は今後一生の仕事として私の生活の根底たる彼の聲、私を強制して私の意志を蹂躪する「我ならぬ我」の正体を究めやうとしたのである。

○私が傳道師を目的として居なかつた事は、大學を休職となると同時に創刊した雜誌の表題を見てもわかる。曰く「思想と生活」。私の雜誌發行に賛成され、初號の原稿を見せると云はれた内村先生は、一見して失望されたらしくあつた。數日後私の妻に「雜誌にはもつと聖書について書かねば駄目だ」と云はれた。然るに一步一步私はいやな傳道をやり始めた。雜誌の表題も「聖書の眞理」と改題した。今では立派な傳道師らしくある。だが私の本性は今でも傳道師ではない。我は無理強ひに傳道させられて居る者である。過日矢内原教授が「君の雜誌を讀むと、君は傳道師だと云ふ氣がちつともしない」と云つた。適評なるかな。(此の篇つづく)。

昭和七年度聖書の眞理總目錄

一月號 (五一)

信仰の進歩……………	一
キリストの十字架……………	二
エレミヤ記の研究(五)……………	六
首都の社會的腐敗……………	六
附 讀者の聲……………	六
希伯來族長時代の諸宗教(一)小栗襄三……………	一六
イエスに由る神の啓示……………佐々木良伍……………	一九
柏木通信(一三)……………齋藤宗次郎……………	二四
祖父の書翰(四)……………	二七
内村先生と非戰論、地を嗣ぐ者……………	二七
滿蒙の支配者 編輯餘録……………	二七
二月號 (五二)	
基督者の不和……………	三三
世の悲惨と神の存在……………	三五
エレミヤ記の研究(六)……………	四三
北よりの禍……………	四三
戰爭論……………藤本武平……………	五一
柏木通信(一四)……………齋藤宗次郎……………	五五
祖父の書翰(五)……………	五九
感謝と希望……………	六四

内村鑑三全集の刊行(一)

三月號 (五三)

我等の立場……………	六五
聖書は神の御言(上)……………	六六
逐語神言説と高等批評……………	六六
エレミヤ記研究(七)……………	七二
申命記發見と宗教の改革(上)……………	七二
復活確實性に就いて……………小栗襄三……………	八六
若き家庭の死別……………鈴木敏元……………	八九
柏木通信(十五)……………齋藤宗次郎……………	九一
祖父の書翰(六)……………	九四
内村鑑三全集の刊行(二) 編輯餘録……………	九四
四月號 (五四)	
擾亂の世と平和の國……………	九七
眞の教會は何處に在るか……………	九八
人間の微小と偉大……………	九八
聖書は神の御言(下)……………	九九
逐語神言説と高等批評……………	九九
シャツクルトンの經驗……………	一一三
エレミヤ記の研究(八)……………	一一四
申命記の發見と宗教改革(下)……………	一一四

五月號 (五五)

受難週間の研究(一)……………小栗襄三……………	一一一
柏木通信(十六)……………齋藤宗次郎……………	一二四
祖父の書翰(七)……………	一二六
走馬燈 身邊漫筆……………	一二六
五月號 (五五)	
機械神と人格神……………	一二九
奢侈なる教育……………	一三〇
神を求むる心(七)……………	一三一
エレミヤ記の研究(九)……………	一三八
神殿攻撃演説……………	一三八
受難週間の研究(二)……………小栗襄三……………	一五一
基督教と結核病……………平山去私……………	一五四
柏木通信(十七)……………齋藤宗次郎……………	一五八
人道主義とマルクス主義……………	一六〇
我が國の二大思潮 身邊漫筆……………	一六〇
六月號 (五六)	
文明の反逆者……………	一六一
祈つて其の効驗ありや……………	一六二
神を求むる心(中)……………	一六三
エレミヤ記の研究(十)……………	一七二
陶工と陶土(上)……………	一七二
洗者ヨハネの疑問……………森本慶三……………	一七九
受難週間の研究(三)……………小栗襄三……………	一八四
柏木通信(十八)……………齋藤宗次郎……………	一八七

祖父の書翰(八)……………一八九
クロムウエルと獨裁政治 身邊漫筆

七月號 (五七)

二つの嚴肅なる死……………一九三
神を求むる心(下)……………一九五
神の自現(上)……………二〇二
エレミヤ記の研究(十一)……………二〇六

陶工と陶土(下)

世界の平和は如何にして來るべきか

藤本武平二……………二一三

受難週間の研究(四)……………二一五

柏木通信(十九)……………二一八

私の謙遜なる誇……………二二〇

祖父の書翰(九)……………二二二

梅雨は長年続く 身邊漫筆

八月號 (五八)

信仰のみと誠實なる信仰……………二二五

外なる成功と失敗……………二二六

神の自現(下)……………二二七

エレミヤ記の研究(十二)……………二三五

巻物の燒棄(上)

社會と家族……………二四四

受難週間の研究(五)……………二四五

柏木通信(二〇)……………二四八

祖父の書翰(終)……………二五一

福音と奇能……………二五五

制度と社會的行動……………二五六

我が國を救ふ基督教 身邊漫筆

九月號 (五九)

不信仰は不自然……………二五七

神の選民(上)……………二五九

文明とクリスチャンホーム……………二六七

エレミヤ記の研究(一三)……………二六八

巻物の燒棄(下)

善きサマリヤ人の話の主眼點……………

受難週間の研究(六)……………二七三

アブラハムの信仰(上)……………二七八

柏木通信(廿一)……………二八四

農村振興と信仰……………二八七

エテオピア國の奴隸廢止 身邊漫筆

十月號 (六〇)

本誌滿五年の感謝……………二八九

神の選民(下)……………二九〇

イエス・キリスト(一)……………二九五

一千古の神秘 二處女降誕

三成長 四受洗

岩なる君こそ我等の立場 身邊漫筆

十一月號 (六一)

我が祈 癒す能力……………三二一

最上の賜物 インチキとギヤング……………三二二

イエス・キリスト(二)……………三二四

五、誘惑

魔法を信ぜず……………三三三

エレミヤ記の研究(十四)……………三三五

エレミヤの悲哀

造船學より見たるノアの方舟……………

受難週間の研究(七)……………三四一

アブラハムの信仰(下)……………三四六

柏木通信(二二、二三)……………三四九

神と自衛權 身邊漫筆

十二月號 (六二)

昭和七年を送る……………三五三

イエス・キリスト(三)……………三五五

六、神の國の到來 七、人の子

八、神の子

神が父であり給ふ事の原因と結果……………三七三

無益なる僕……………三七四

柏木通信(二四)……………三七九

身邊漫筆

身邊漫筆